

実践例「学習指導の充実・深化」

「課題6 主体性を育てる学習指導過程の改善と充実」

I 学校名 栗山町立継立小学校（空知管内）

II 研究の概要

1 研究主題

「主体的に学び、互いに高め合う子どもの育成」

～ICT機器等を活用し、交流することで学びを深める指導の工夫～

2 北海道へき地・複式教育研究連盟 第10次長期5カ年計画との関連

栗山町は、農業を基幹産業としており、福祉にも力を入れている。各小中・高等学校においては、町立の北海道介護福祉学校と連携した教育を位置づけ、町ぐるみで取組を進めている。「ふるさとは栗山です」を合い言葉に教育が進められており、ふるさとを大切にし、今後生きる子ども達を育成していく視点で、本校では稲作体験学習を継続的に行っている。その様々な取組は北海道へき地・複式教育連盟の研究主題とリンクしており、本校の研究主題もその趣旨に沿ったものとなっている。

本校は、複式学級が1学級の小規模校であることから、複式教育をメインに研修を行うのではなく、サブテーマにICT機器等の活用を設定することで、少人数指導に複式教育指導を含め、課題6の解決に向けた研修を進めている。今回はその実践を紹介する。

3 実践（研究）の基礎となる考え方

学習指導の深化・充実に向けては、複式校特有のわたり・ずらし、間接指導時の方法論など、指導過程を含めた教科指導を中心に捉える研修も多く見られるが、本校は、複式学級が1学級ということもあり、少人数の学級という捉えで研修を進めることにした。

主体性を育てるために、教科指導を充実させるための基礎的な力（特に3観点のバランスを考え）を共に育成することを大切にし、独自の教育課程を編成している。そこで、基礎として必要となるコミュニケーション力や人間力等の育成を充実しつつ、教科指導を充実していくことの2点について両輪で進めていくことにした。

4 研究内容①「コミュニケーション力等の育成について」

コミュニケーション力等の基礎的な力については、探究的な学習や体験活動を以下のように充実することで育成していくこととした。特に少人数の学校だからこそ、1人1人に貴重な体験の場を保障することができる。

- ① 地域と協働したふるさとキャリア教育活動（地域人材を活用した授業）
 - ・しめ縄づくり、福祉体験、書き初め大会等（福祉体験は

北海道介護福祉学校の協力)

- ・ 農業体験やふるさと教育の実施
 - ・ 小中高で連携したキャリアパスポート（ノート）の作成
- ② 雨煙別学校と協働した授業
- ・ 雨煙別学校とは、閉校した学校を再利用した NPO 法人が運営する施設
 - ・ 自然体験を中心とした教育プログラム
 - ・ 総合的な学習の時間、理科、図工など教育課程に合わせた内容
- ③ 他校との合同学習
- ・ 町内の幼保小連携、小小連携（4年生以上）、小中連携（6年生）による学習
 - ・ 姉妹都市（宮城県角田市）の学校とのオンライン学習



3 研究内容②「教科指導（個に応じた指導）の充実について」

- ① 指導過程・指導方法の工夫、デジタル教科書・1人1台端末を活用した授業
- ・ 本校の端末 Google chromebook
 - ・ Google for Education の有効活用
Classroom を活用した学習計画
間接指導時・振り返り場面の交流等における Meet、jamboard、Forms の活用
習熟・評価時におけるデジタルドリルの活用
その他、ドキュメント、スプレッドシート、スライドの活用
- ② デジタルドリルを活用した自主学习
- ・ 有効な活用場面
学習の振り返り（複式学級では習熟・評価時）
レディネステスト・復習としての活用
間接指導時の動画視聴等
端末持ち帰り時の宿題や家庭学習での活用
- ③ プログラミング教育の充実
- ・ プログラミング教育の年間指導計画の策定
情報活用能力の育成に関する体系表
各学年で取り組むプログラミング教育（スクラッチ・マイクロビット等）
- ④ ファシリテーター型授業の構築と ICT の活用
- ・ 複式学級における同時間接指導と単式学級における間接指導を取り入れた授業
子供主体となった自ら作る授業
全教科で実践を積みあげる



Ⅲ 実践例

1 理論研修について（1/3 及び 2/3 年次の取組）

- ① 1人1台端末活用に関する動画視聴
- ② ICTスキル体系表、年間指導計画の策定
- ③ 各教員の1人1台端末活用状況の交流
- ④ プログラミング教育に関する年間指導計画の策定
- ⑤ プログラミング教育の実践
- ⑥ 情報モラル教育の実践



2 実践研修について

- ① chromebook の実技研修
- ② プログラミング教育に関して講師を招聘した理論及び実技研修
- ③ 全員の授業公開（体系表の活用、振り返り場面での jamboard の活用・記録）
- ④ 指導主事を招へいた研究授業
- ⑤ 公開研究会の開催

3 公開研究会の実践

3. 4年 体育科「マット運動」

後転のポイントについてプログラミング的思考を活かしながら、順次処理で考え、正しい後転ができるように取り組む。その際、順次処理に沿った動きができていたかをグループで確認・交流しながら互いの運動技能の向上を目指す。まとめでは、最初に撮影した後転の様子を見ながら個々に成長した様子を振り返る。振り返りは Google フォームで行うという内容で授業実践する。





IV 研究の成果と課題

1 成果

- ① 文房具の一部としての日常的な端末活用が行われ、様々な学習への活用ができるようになった。
- ② 1人1台端末の活用により、友達との交流を苦手としている子どもが積極的な発信をするようになってきた。
- ③ 子どもの学習の成果（ノートや提出物、jamboard等によるデータ化したもの）が記録化され、評価を適切に行うことができるようになった。（間接指導時の見落としの減少）
- ④ デジタルドリルの活用により、間接指導時の自学体制が整い、子どもの学力の定着度も確認できるようになった。（子どもも教員も）
- ⑤ ファシリテーター型授業（主体的・対話的で深い学びの充実）を進めるため、子供を主体とした授業を行う（同時間接指導や単式学級における間接指導型授業）ためにICTの活用が有効であった。

2 課題

- ① chromebookの机上での置き方（教科書・ノートとの関係）をどうするか。（場所を取るため）
- ② 文字を書かせる機会の減少、タイピングの時間の長さ（個人差）による教育効率の低下をどうするか。
- ③ 今まで行ってきたノート指導の必要性をどう考えるか。
- ④ 情報モラルに関する指導の充実をどうするか。（検索の仕方、チャットの書き込み等）
- ⑤ 端末導入に伴う教員の負担軽減はあるが、逆に負担増加していることへの対応をどうするか。（市町村での端末の違い、取り入れているアプリの違い、端末を活用するための授業準備等）